川村　孫兵衛重吉　―北上川の流れを変える―

川村孫兵衛は天正三（一五七五）年、長州（現在の山口県）で生まれました。孫兵衛が仙台にやってきたのは、二十代の半ばのころでした。若いころから土木の仕事にかかわり、いつかその知識と技術を人のために役立てたいと考えていました。そのようなときに、仙台藩主の伊達政宗に認められたのでした。

孫兵衛は政宗に仕え、命じられるままに鉱山や塩田の開発などに一つ一つ取り組み、やりとげていきました。

政宗の命令により、忙しくあちこちの工事の現場を指揮していた孫兵衛でしたが、この地に初めて来たときから、心に、ある思いを秘めていました。それは北上川の改修工事を必ず成功させ、野谷地から水を引きぬき、田畑に変えてみせるというものでした。広大な野谷地をわがもの顔で流れる川の水に、家や田畑が飲みこまれて困りはてていた人々の姿が孫兵衛の目にずっと焼きついていたのでした。

元和九（一六二三）年、孫兵衛は四十九歳のときに、川の改修に欠かせない柳津と飯野川の間の流れを止める工事を完成させました。ついに悲願であった北上川や迫川、江合川の三つの川の合流の工事に取りかかりました。その年には孫兵衛は、家族を伴って釜の地（現在の石巻市）に移り住んでいました。

石巻市日和山の孫兵衛像

野谷地…広い湿地帯。

しかし、人手や道具が不足していて、工事は思うように進みませんでした。くわで一かき一かきしてほり下げていき、固い粘土のかたまりをもっこで運び上げていたときです。かつぎぼうの後ろ側をかついでいた人夫が小石に足をとられ、ゆらりと体がかたむき、前の方をかついでいたもう一人の人夫を巻きこんで、ほり下げた穴に転げ落ちてしまったのです。

「だいじょうぶか。動けるか。」

「今、手を貸すから動くな。気をつけろ。」

仲間の人夫たちが口々にさけびます。工事になれていた人夫たちもつかれはて、集中力を失っていたのです。

やはり無理なことだったのだろうか。まるで東北一の大河が、孫兵衛に自分の流れを変えられるのをこばんでいるかのようでした。孫兵衛は一心に考えました。つかれきった様子の孫兵衛を気づかった人夫頭が話かけても、孫兵衛の耳にはとどきませんでした。孫兵衛に重くのしかかっていたのは、はかどっていない工事のことでした。工事にはたくさんの費用がかかっていました。藩から準備されていたお金は、すでに底をついていました。また、人夫たちのつかれも限界に達していました。困っているはずの地域の住民たちからさえも、改修工事について、

「そんなことができるはずがない。」

「ここで生まれ育ったものでもないくせに何を言っている。」

「これまではたまたまうまくいっていただけ。」

という声が出るようになりました。

そんなとき、孫兵衛は、川の流れにじっと目を向けるのでした。

以前、孫兵衛が仙台のお城に行ったときのことです。孫兵衛は工事の進み具合いを政宗にたずねられました。

「川のつけ替えはどうじゃ。」

孫兵衛は、どろと汗まみれで一生懸命に作業する人夫たちの姿を思いうかべました。自分を信じて工事に取

もっこ…わらを網状に編んで作った土などを運ぶ用具。

り組ませてくれた政宗には、きちんと報告しなければならない。しかし、ここで工事がおくれていることを話すと、人夫たちに負担をかけてしまうと考えました。

孫兵衛は一瞬、間を置いて、

「はい、このくらいでございましょうか。」

と、自分の首のあたりを示しました。

そして数日後、孫兵衛の工事現場を政宗が視察にやってきたのです。政宗は、工事がおくれていると感じていたのですが、

「孫兵衛、たしか、このあたりまでほり進んでいたのだったな。」

と、首のあたりで手を止め、平然と言い放ちました。孫兵衛の側にいた人夫頭は青くなりました。

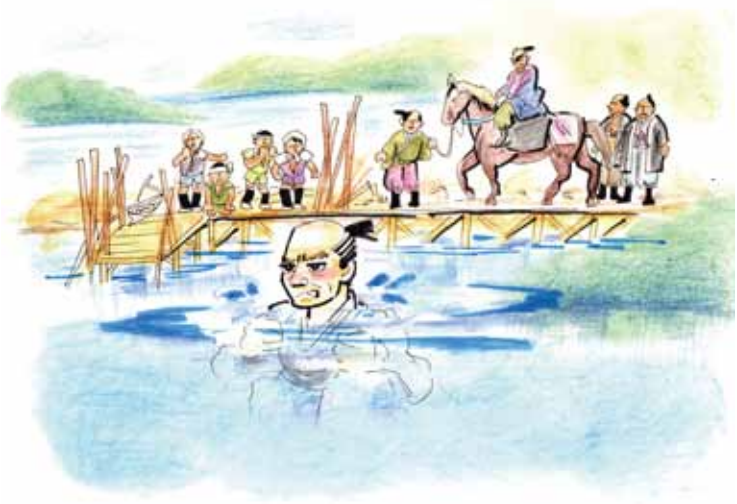
「はい、さようでございました。」

孫兵衛は迷わずそう言うと、川の中へずんずん入って行きました。その様子を見ていた人夫たちは、その場の緊張した空気に息を飲みました。工事はおくれており、首どころかへそのあたりにもなっていませんでした。孫兵衛は、水しぶきをあげながら川の中ほどまで歩いて行くと、ずんと腰を下ろしました。川面が波立ち、孫兵衛のあごのすぐ下でゆれて光っていました。それを見た政宗は、

「ふむ、そうか。首のあたりであるな。」

と言うと、くいっと手綱をとって馬の腹をけり、そのまま仙台城に帰っていきました。

孫兵衛は、工事のおくれを人夫たちのせいにすることはありませんでした。また、人夫たちを休ませずに働かせたり体の弱った者をやめさせたり、けがした者に無理をさせたりはしませんでした。それどころか、人夫たちに酒や肴をふるまったり、孫兵衛の自宅の風呂を使わせたりすることもありました。



肴…お酒を飲むときにそえる食べ物。

工事が進むにつれて、人夫たちの耳には、工事の費用が足りなくなって、孫兵衛が金持ちの家にかけ合ってお金を集めまわっているらしいという声も聞こえてきました。一軒では足りず何軒も訪ね歩き、頭を下げているらしいというのです。その話を聞き、人夫たちは工事が必ず成功することを信じて作業を続けました。そして、改修工事の全体が見えてくるようになると、ますます人夫たちの作業もはかどりました。それまで孫兵衛を信用していなかった人たちも、工事の成功を強く願うようになりました。

寛永三（一六二六）年、四年の年月を経て、迫川、江合川と北上川の合流とつけ替えの工事が終了しました。ある晴れた日、和渕（現在の石巻市和渕）の土手に立つ孫兵衛の姿がありました。孫兵衛の視線の先には迫川と北上川、そして江合川の合流した新たな川のゆうゆうとした流れがありました。

孫兵衛の工事により、仙北の平野では、野谷地が新田になり、米作りのための水が確保されるなど、安心して耕作できるようになりました。仙台藩ばかりでなく南部藩（現在の岩手県の南部）の城下町盛岡までの船の航行が可能になり、迫川や江合川からもぞくぞくと米俵を山積みにした船が石巻に下りました。集められた米は千石船によって直接江戸に運ばれるようになり、その数は江戸で消費される量の三分の一から二分の一にまでおよんだということです。

川村　孫兵衛重吉

川村　孫兵衛重吉は、天正三（一五七五）年、長州藩（現在の山口県）に生まれた。伊達政宗に取り立てられ、土木工事や鉱山開発、運河の建設の仕事で活躍した。四十九歳のときには、北上川の流れを変えるという難しい改修工事を成しとげた。毎年八月に盛大に行われている「石巻の川開き」は、孫兵衛への感謝の気持ちもこめられた祭りである。

千石船…江戸時代に、米などを運ぶために使われていた大型の和船。